

エビネの低温処理と日長条件が開花におよぼす影響

佐藤義機

この実験はエビネ(*Calanthe discolor* LINDL.)株を低温処理すると人為的に開花が調節できるかどうかを知るため、花芽形成後のエビネ株を0°Cで、20日間、40日間、60日間処理し、10~30°Cのガラス室において異なった日長条件下で栽培し、開花の状態を比較検討した。

短日条件下では無処理と20日間の低温処理では全く開花がみられず、40日間で16%、60日間で約70%が開花した。一方、長日条件下では無処理でも8%が開花し、20日と40日間の低温処理で22%、60日間で77%が開花した。

長日条件下で無処理株の到花日数は146日であったが、20日間の低温処理で110日、40日間で35日、60日間で33日となり、低温処理期間が長いほど、到花日数は短縮された。

低温処理株でも開花しないものがあつたが、この主な原因は花芽が伸長せず、花芽が枯死したためであつた。

以上のことから、エビネは花芽の完成後に、低温処理すると開花時期が早くなり、開花率を増大させることが判明した。